このひと

少しずつ、しかし根底から生き方を変えた「人権担当」という仕事

大西 英雄さん
大阪同和・人権問題企業連絡会理事長

ショックだった人権推進部への異動

若い世代とも熱く語り合い、あらゆる学習会に熱心に参加する。大西英雄さんは、大阪同和・人権問題企業連絡会理事長という肩書きをもつが、そんな枠を飄々と超えているように見える。しかし、以前は大きく報道される人権侵害にも関心をもたず、仕事最優先の会社人間だった。

勤めていた損害保険会社で、入社23年目にして人権推進部に異動となった。ショックだった。「営業こそが主であるという思いと、人権担当という部署に勝手にマイナスイメージを抱いていたんですね」と苦笑いする。でも、社長の「人権は本業の基本である」という言葉を聞いて、自分の中にすとんと落ちた気がした。

多様な人がいることを身をもって学ぶ

異動した人権推進部で、大西さんは人権研修の企画と運営を始める。もともと好奇心旺盛で勉強熱心。まずは各職場の管理職が既製のビデオリストから選んで行っていた研修を、人権推進部がテーマ設定をして全社統一のオリジナルテキストを作成し、それをもとに行う方法に変えた。研修後は報告書とともに受講者の感想文を送付してもらうことにした。

ある時、「今日のビデオは何もわからなかった」と1行だけ書かれた感想文があった。

「この人は何を書いてるんだ、あのビデオがどうしてわからないのかとムッとしました」。報告書を確認すると、「うちには耳の聞こえない職員がいます。今後はテロップの入ったビデオを選んでください」と書かれていた。「頭をぶん殴られたような気持ちでね。偉そうなことを言いながら、自分の職場に耳の不自由な方がいるとは考えたこともなかった。」

あわてて手話センターに手話の手配を申し込むと、「耳の不自由な人といっても、中途失聴の人、生まれつきの人、大声なら聴こえる人といろいろです。みんながみんな手話ができるわけでもありません。その方が何を望んでいるのかを訊いてこられたのですか」と問われた。「さらにショックでした。社会にはいろんな人がいるんだということを身をもって教えられました。」

この経験をきっかけに障がい者問題に取り組む。在日コリアン、パワハラやセクハラなど、どんなテーマにも取り組んできたが、どれも当事者の声を聴くことを大切にしてきた。

人権を学ぶなかで家族を抑圧する自分に気づく

さまざまなテーマを通じて人権とは何かを考え学び続けるなかで、大西さん自身が少しずつ変わってきた。「昔はテレビを観たり、新聞を読んだりしながら、家族の話は受け流して、子どもに『勉強はしたのか』と頭ごなしに説教していた。連れ合いには『あなたは私や子どもたちに対してどれだけ差別発言をしていたか』とよく言われます」とまたも苦笑い。「目の位置が変わったと思います。」今は自ら食卓を整え、コーヒーを淹れる。習い事に出かける妻の送り迎えも買って出る。

今、娘からは「お父さん、どうしてもっと早く人権の担当になってくれなかったの」と、息子には「いい話ばかりせず、自分のマイナス部分も話してよ」と言われる。「昔のことは取り返せないけど、これからいい関係を築いていくことはできる。若い頃は出世を夢見ていたけど、今は家族も含めて人と心を通わせたり、助けてと弱みも素直に出せる自分がうれしいですね。」